

● 「たけちゃんブログ」から

① ロシアは普通の国でした。初めての東ロシア】



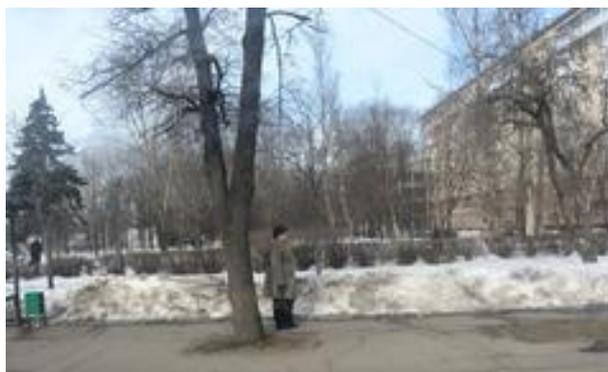
花阪爺さんのともだちに、有名な柔道家 山下泰裕さんがいる。現在東海大学体育学部長、全日本柔道連盟理事を務める傍ら、NPO 法人柔道教育ソリダリティーを立ち上げ、柔道を通じた国際交流、人づくりに注力されている。ソリダリティーとは、ポーランドのワレサ議長が使った有名になった言葉で、日本語では「連帯」と訳されている。この国際交流の一環として、山下さんがロシアのモスクワとサンクトペテルブルグに行くので、一緒にどうかというお話を花阪爺さんからいただき、喜んで参加した。山下さんとは、何度か酒を酌み交わしているのでも、気楽にお話できるのも幸いした。ロシアの中核部は、たけちゃんにとっても初めての訪問、BRICsの中でただ一つ訪れたことのない国であったので、興味津々好奇心丸出しで、ワクワクしながら出かけたのである。

結論から言うと、ロシアは想定外の「普通の国」であった。前にウラジオストックに行った時にも書いたが、ロシアに対するたけちゃんの先入観は、1、戦争が終わっているのに日本に攻めてきて、多くの捕虜を虐待した。2、その時の四つの島をいまだに返さない。3、北オセチアの学校占拠事件の時、プーチン政権は強行突入をして、300人以上の児童と父母が犠牲になった。4、ギャングによる暗黒の地下経済が存在する。密輸と汚職がひどい。5、プーチンを始め実力者に秘密警察出身者が多い。6、20年ぐらい前、頻りに乗り換えていたモスクワ空港の暗い照明と無愛想な軍服の係官のイメージ、などなどで、たけちゃんにとっては、ロシアは「怖い国」であった。先進的な経済人の中でも、このような先入観を持っている人は多いと思われる。

ロシアと交流を深めている山下さんの言によれば、日本人の対ロシア感、ロシア人の対日本感のギャップは、日本と他の国の関係の中で、一番離れているとのことであった。幸いなことに、ロシア人は日本が好きで多く、日本文化にある種の憧れと尊敬を持っているように見える。柔道の国という意識も深い。そして、モスクワとサンクトには、それぞれ数百軒の日本料理店があり、ロシア人は本当に日本料理が大好きなのである。山下さんは、このあり得ないギャップを何とかして埋めることによって、両国の交流が深まるように、柔道を通して「行動」を起こしているのである。プーチンが熱心な柔道家であり、個人的にも山下さんが大好きだということも、この行動をより価値あるものにしていくのだ。

たけちゃんも今回の貴重な体験を通して、ロシアに対して抱いていた恐怖感、不信感はずっかり影を潜め、中国やインドよりも親近感を覚えたのである。

今回成田から乗り込んだ飛行機は「エアロフロート」、世界で一番安いという定評のある航空会社である。ところが、機材は何とエアバス322、真新しい内装が、最初の驚きであった。機内食のレベルも、ビジネスクラスではあったが、日本の航空会社より旨いという印象。特に朝食のオープンサンドイッチに付いてきた「茶碗蒸し」が出色。サービスも違和感はなく、最近の日本の減員された搭乗員によるサービスなみといったところ。ただし、日本語放送は、技術的な問題もあるのか？ほとんど意味不明であった。モスクワ空港では、山下さんの顔で、VIP 入国。ホテルでロシア要人との夕食が終ったのは、午後11時、日本時間の朝の5時、意識朦朧であった。



写真は、モスクワのクレムリン(砦の意)、根雪のモスクワ市内、モスクワ唯一の観光



写真 深夜のクレムリン。モスクワでは山下さんの公式行事が目白押し。

## ②【モスクワの二日目 ガスプロム訪問】

モスクワでの二日目は、山下さんのガスプロム社員子弟向け柔道教室への同行。ガスプロムと言えば、世界最大の天然ガス会社でロシアの国家税収の四分の一を占める巨大企業。プーチンによる権力闘争の舞台となった会社である。現在の大統領メドヴェージェフは、直前までこの会社の会長であった。この会社に対するたけちゃんのイメージは、「経済マフィアの巣窟」と言ったところだが、なんと聞くと見るとでは大違い。玄関のチェックもそれほどではなく、幹部も社員も、出会う人すべて、人品卑しからず、全員が白人で、優良企業然とした素晴らしい会社であった。従業員30万人、恐らくロシア中のエリートが集まっているのであろう。もっと驚いたのが、その教育センター、ガスプロムの企業内学校だ。表向きは外部にも開放しているとの説明であっ

たが、ほとんどは、従業員の子弟のための特別な学校。6歳から17歳までの一貫教育で、生徒数は600名、先生は4人に1人の176名、300人のスタッフがこれを支えている。そして食費以外はすべて会社負担となっている。

山下さんは、この教育センターの子供たちを前に、熱く柔道を語り、道場に降りて自ら子供たちを指導されていた。繰り返し出てくる言葉は次のようなものである。

- 1、柔道とは、技の習得のみではなく、人間を作るものである。
- 2、柔道で学んだことを人生に活かしてほしい。誰もが柔道のチャンピオンにはなれないが、人生のチャンピオンには誰もがなれる。
- 3、戦う相手を尊敬すること。相手があるから進歩するのであって、やっつけるだけなら喧嘩と同じだ。仲間と力を合わせて進歩するということを学びなさい。

子供たちは、本当に一言一句聞きもらすまいと、真剣に山下さんの話を聞いていた。そして、これは文化の違いだろう。山下さんの言葉に感動した時には、その都度拍手をするのである。この反応に色眼鏡で見る向きもあるかもしれないが、たけちゃんも、素直にこの拍手に感激した。心からの拍手だ。

そして、両国の間に横たわる政治、イデオロギー、権力闘争を超えて、「人間として大切なもの」を教えようとされている教育者としての山下さんに深く敬意を表したい。

#### 【ガスプロム】

エリツインの打ち出した分割民営化路線をプーチンが見直し、権力闘争を経て、新興財閥の台頭を抑えて半国営の独占企業に変質させた。プーチンによるエネルギー産業の国家支配政策である。そして天然資源を武器にロシアを復活させたのである。サハリンの日本の商社をはじめとする外国資本の強制買収のニュースも記憶に新しいし、ウクライナに対する恫喝外交もつい最近の話だ。一方で、この自由競争とはほど遠く、社会主義国家から抜け切れていないプーチンの政策が、資源エネルギーからの富を個人から国家に取り戻し、ロシアを復活させたという評価があることも事実だ。今やガスプロムは、時価総額世界第3位の会社である。



写真は、山下さんとガスプロムの子供たち、真剣なまなざしで山下さんの話を聞く



子供たち、人間的魅力に溢れた校長先生とたけちゃん。

### ③【 Санктペテルブルグ】

Санктペテルブルグの公式行事は、プーチンが副市長時代に創部し、現在も名誉会長を務める「 Санктペテルブルグ ヤワラ ノバ 柔道の会」(ノバは Санктを流れる川の名前)との交流。山下さんにとっては5回目の訪問である。会場の道場には、プーチンと山下さんの談笑している写真の他、この道場で首脳会談をした小泉元首相の姿も掲示されていた。外務省は、時間が取れないプーチン大統領との首脳会談をセツトするために、民間の山下さんの人脈を使ったのだ。たけちゃんも、首脳会談が行われた小部屋のプーチンが座った椅子に座らせてもらった。小さな子供から中高年までの柔道愛好家への指導は本格的、サンボと呼ばれるロシアの格闘技のチャンピオンや金メダリストの女性柔道家も加わって乱取りが始まった。続いて「受け」のできる現地の柔道家をパートナーにして「内股」、「大外刈り」などの技の指導、相手の重心の移し方など専門的なところまで及んでいた。時折発せられる山下さんによる柔道の心の解説にも、全員真剣に聞き入っている。

次の公式行事は、 Санктペテルブルグ大学 三井物産の冠講座 「柔道を通じた自己改革 (山下泰裕氏)」。三井物産は、サハリンをはじめとしたビジネスのこともあるが、CSR 活動の一環としてこの講座を続けている。学ぶべきアクションだ。ここでも学生たちは、山下さんの説く柔道の心を真剣に聞き入っていた。

この後、山下さんは、友人プーチンの急な呼び出しを受けて、モスクワに直行。プーチンは、忙しいスケジュールをやりくりして、夜9時に時間を取ってくれたそうだ。

結局前の会議が伸びて、面会ができたのが11時半、通訳一人だけが加わった二人だけのお話は、深夜まで続いたという。現地のプーチンに近い人たちの説明によると、彼は忙しいクレムリンの業務の中で、山下さんとの時間を含め柔道に触れる時間を非常に大切にしているとのことであった。この日の懇談の様子は、翌日プーチンのホームページに写真入りで公開された。



写真は、ヤワラノバの会での練習風景、道場の壁には二人の写真、首脳会談のため



この道場を訪問した小泉首相訪問時の写真も。

#### ④【ロシア滞在 3 日目】

ロシア三日目は、モスクワからサンクトペテルブルグへの移動日。明日からの公式行事を前に、つかの間の休日だ。山下さんが、ロシアで一番好きなことに挙げている「サウナ（ロシア語でバーニャ）」に同行させてもらった。地元の柔道家が案内してくれたのは看板も出ていない高級サウナ、多分セキュリティ上の問題があるのだろう。マッサージも付いている。胸毛だらけの大男がやってくれるイメージだったが、現れたのは水着を着た女性、妙齢とはいえいまでも女性は女性、たけちゃん、大いにリラックスした。オイルを使ったフットマッサージで、シンガポールで始まったこのサービスは、今や全世界的となった。日本にあるサウナは、フィンランド式で、ロシア式のバーニャは、花阪爺さんもたけちゃんも初体験。たけちゃんは風邪でサウナは遠慮したが、花阪爺さんは、思い切りロシア式サウナを体験して大興奮、体験談を語ってくれた。

フィンランド式(100℃)よりは少し低温だが、それでも石で熱した50～60℃の部屋に何度も入り、慣れると30分近くも入る。ころ合いを見計らってむくつけきオヤジが入ってきて、お客を白樺の葉っぱの上に寝かせる。同室のお客はそれを観察している。石に水をかけたもうもうとした雰囲気の中で、たっぴりと水を含んだ白樺の葉の束(バーニャ)で背中をバンバン叩き始める。花阪爺さんに聞くと、音はすごいが、それほどの痛みや衝撃はなく、意外と心地よいマッサージ効果が得られるという。背中が終わると、仰向きになり覆うものが何もないスッポンポンの体を再び白樺でたたく。叩くことによってさらに血行が良くなり、木の葉からは薬効成分が出てくる。熱くなったところで外の水風呂に飛び込んだ後、オヤジによる水かけ、冷水を頭からドバツと何

杯もかけてくれる。悲鳴に似た花坂爺さんの大声がこちらまで聞こえてきた。以上、山下さんが病みつきになったことが理解できた体験であったようだ。

心身ともにリフレッシュした後は、カフェでビールとおつまみで懇親、最初から最後までタオル一枚の裸の付き合いだ。山下さんは、全日本の監督時代、ロシアのチームとの合同合宿で、このサウナの醍醐味を味わってから病みつきになったようだ。この日は高級なお店であったが、サウナは本来ロシアの大衆のなかに、生活の一部として根付いている習慣。肉体労働の疲労回復や、予防医学的要素の他、精霊信仰に結びついた呪術的な側面をも持っている。そして、大都市では今はそれほどでもないらしいが、都市近郊や地方都市では、ダーチャと呼ばれる家庭菜園付き小屋に、このバーニャが併設されることが多く、自然を愛するロシア人の心のふるさととなっている。



写真はロシア風サウナ バーニャでの交流会、バーニャの内部

## ⑤【エルミタージュ美術館】

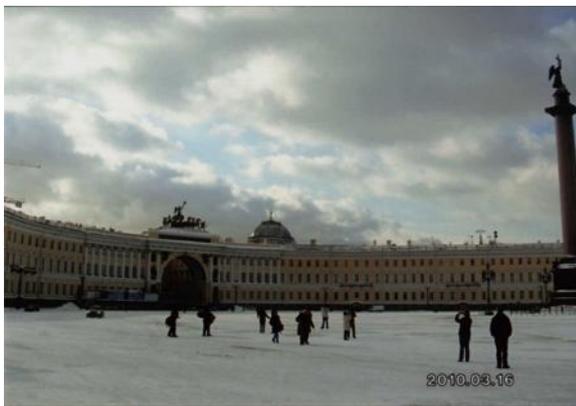
サンクトペテルブルグにピョートル大帝が建都を始めたのは1703年、ロシアの近代化を考え、ヨーロッパへの窓を開くべく、バルト海への出口、フィンランド湾の河口の沼地に無理やり決めたようである。建設は困難を極めたが、1712年完成、モスクワから首都が移された。計画的に造られた街だけに整然とした美しさがある。18世紀後半には、女帝エカテリーナ2世が領土を拡大、ロマノフ王朝の栄華の時を迎える。文学やバレエ、オペラなどの芸術も花開いた。やがて、革命運動や労働運動の拠点になり、ついに1917年十月革命によって社会主義政権が誕生。1918年首都はモスクワに戻された。わずか100年前の出来事である。第二次世界大戦中は、フィンランド、ドイツ軍によって約400日の包囲を耐え抜いた経験を持つ。今は、欧州も含めて最も中世の姿が残されている町としてモスクワをしのぐ観光客が訪れている。

サンクトの行事を終え、日本に帰る日の朝、この町の観光の最大の目玉「エルミタージュ美術館」を訪れた。冷たい雪の舞うサンクトは、人影もまばらで、美術館見学には最高の時期であった。エルミタージュとは「隠れ家」を意味し、エカテリーナ2世の私的なものであったが、現在は世界三大美術館の一つとして数えられ、その華麗な建築物と圧倒的なコレクションは、まさにロシアの至宝として人気を博している。たけちゃん達は、限られた時間で見なければならぬため、おのぼりさんコースに絞って駆け足で見学した。もちろん徒歩で

階段の上り下りもあり、結構なメタボ調整となったが、途中で買ったエビアン（Ebi-an）の小瓶が450円も取られたのは、忘れられない。この日観賞対象にしたのは、1、世界に14点しかないレオナルド・ダ・VINCIの絵画のうちの2点 2、硫酸がかけられたことで有名になったレンブランドの「ダナエ」3、その他ルソー、モネ、マティス、ピカソ、セザンヌ、ゴーギャンなどの名作である。有名な絵画が次から次に目の前に現れるのもすごいが、フラッシュを使わなければ写真を撮るのも自由というのが、ロシアらしい大らかさで気に入った。

美術には、それほど造詣が深くないたけちゃん、次の機会には、僅か300年の中で揺れ動いた「サンクトペテルブルグの歴史と人々の心」にゆっくりと触れてみたいと思っている。王朝の栄華、王制の崩壊、社会主義政権の誕生、400日の包囲戦、ソ連の崩壊の中で生き抜いたロシアの人々の心の中を覗いてみたい気がするのだ。

また、1782年航海中に台風に遭遇し、漂流8ヶ月のちロシアに漂着、首都サンクトペテルブルグまで行きエカテリーナ2世に謁見、許されて日本に戻った大黒屋光大夫の話にも興味をそそられる。



写真は、エルミタージュ美術館、たけちゃんが気に入った絵「マチスのダンス」

## ⑥【初めてのモスクワ、サンクトペテルブルグ、また行きたい国】

初めての訪問で、ビジネスについて語る資格はないが、世界で交渉が難しい三ヶ国（インド、北欧、ロシア）の一つに入っているロシア、たけちゃんの皮膚感覚から言うと、インドよりはマシ、後は似たり寄ったりで、人による、会社によると言ったところ。ロシアの駐在員の言葉を並べると次のような感じだ。「甘くない」「厳しい」「大きな貸し借りが比較的効く」「義理人情が効くことがある」「最後になってひっくり返すことは比較的不い」。たけちゃんの初訪問の感想では、この国との商売は、いわばこれから。国と企業が安定し始めており商売を始めるにはちょうど良いタイミングだ。久しぶりに血が騒ぐ。これまでは、窓口の人が頻繁に変わっていて、継続性がなかったようだ。

2、ロシアの人々の性格については、比較的高評価が多い。「性格が良い」「奥が深い」「面白い」「日本最良」「素朴」。中国で、駐在員から中国が好きということはあまり聞かないが、ロシアでは、この国が好きと言う人が多い。

何でも大げさに言うことが好きなようで、本当は40年ぶりの大雪を150年ぶりと言ったりする。男の寿命は60歳台、女性は70歳代らしい。飲みすぎ食べすぎが原因？

3、社会的にはまだまだ未成熟。駐車にルールがない。渋滞、スリ、コソ泥、アル中など。サンクト行き飛行機は、突然ゲート変更の上、すぐ出発した。言葉の分からない人への配慮はなし。危うく乗り遅れるところであった。

4、この国の最大の問題は腐敗。どの国にもついて回る話だが、特にひどいようだ。カナダオリンピックのロシアの負け方は御存じのとおり。強化費は充分あったそうだが、選手の選び方に腐敗が絡んだとのことで、担当の大臣がクビになった。選ばれなかったことに腹を立て、旧ソ連の国に転籍してメダルを取った選手が数名いるそうだ。密輸もひどいが、最近テレビだけは密輸が無くなった。だんだん良くなりそう。

5、モスクワ、サンクトの経済水準は、たけちゃんの直感で中国の都市並み。ホテルレストランのサービスレベルは、中国よりうえかな？

6、ものづくりには向いていない感じ。安く買って高く売ることに一生懸命。技術を渡しても、競争相手にはなりそうもない感じがする。資源で稼いだお金を使うだけの国だから、意外に良いお客さんかもしれない。大統領は、国の付加価値を上げようと鼓舞しているが、国民は関心がないようだ。

7、日本人の対ロ、ロシア人の対日、このギャップが大きいと前に書いたが、この原因は、スターリン個人にあるという人がいる。本来ロシア人は、これほど日本人に嫌われるはずはないというのだ。プーチンも、「私はこれ以上日本を敵対するようなことはしない」と言っているそうだが、たけちゃん今回の旅で信用したい気になっている。ちなみにサンクトには寿司屋が350件。ほとんどが裏巻きで、日本人の板前は一人もいない。でも食文化は大切だ。

8、ロシアの冬は厳しい。今年は特に寒く、雪も多かったそう。一月にマイナス35度を記録したらしい。たけちゃんの滞在中もマイナス15度を記録した。この温度で10分歩くと凍傷になる。帽子をかぶらないと血が凍って死にいたることもあるという。

9、ウラジオストックは、日本製の中古車ばかりだったが、モスクワ、サンクトの車は高級車が多い。フォードとフォルクスワーゲンが多く、割当制で価格は日本より高いそう。転売するともうかるのか？日本車はこれからだ。サンクト周辺に日本企業が進出を始めている。



10、ロシアの商売は、参入者数がコントロールされていて、余り値下げ競争が起きないそうだ。その分物価が高い。企業は安定的に利益が出せる。

11、税金は13%。この数字が決まった理由は、文句言わないで、素直に払う率だという。余り高いと払わない人が増えるからというのが面白い。これで問題ないのは、国が天然資源で儲かっているからなのだ。世界には色々な国があり、色々なやり方をやっている。平和で、癖のない優等生の日本が、今や異質に見え始めた。世界は特徴がなくスピード感に欠ける日本を無視し始めているようにも見える。

12、この国にはチャイナタウンがない。それらしいものがあつたが、コピー問題で閉鎖された。関係ないかもしれないが、この国はモンゴルに400年以上占領された歴史を持つ。

13、バレエのくるみ割り人形を見た。本当の良いものを見たという感覚が残った。フラッシュたかなければ写真撮影自由。より良い席に空席があると我先に移動する習慣。大らかで良い国だ。バレエの群舞も揃っていない、揃えようとしめない個人主義もこの国らしいと感じるようになった。買いかぶりかな。



14、今度もいろいろなロシア料理を食べた。ウラジオストックで食べたロシア料理は素朴で、シンプルで「生きるための食事」といった感覚であつたが、中枢部はさすがに格が違う。世界と競争できる洗練されたものであつた。サンクトが本場のビーフストロガノフ、具の入ったパン ピロシキ、テーブルビートの赤が鮮やかなボルシチ、ピクルスの付け汁の入った二日酔いに効くサリヤンカスープなどなど、美味しく頂いた。それでも帰って体重を計ると2キロ増になっていたのには驚いた。気をつけていたつもりだったが、見かけより脂が多いのかな？

これにて初めてのロシア見聞録は終わり。一流のホテル、一流の人々、一流の駐在員との交流で、偏った印象を持ったことは否めないが、少なくとも為政者は栄枯盛衰を繰り返してはいるが、「人類は皆兄弟」という感覚はここでも実感した。そしてこの度もまた、多くの出会いがあり、その人たちが、たけちゃんに新しい夢を与えてくれた。感謝。



写真は、ロシアの定番料理モスクワ・サンクト編、ボルシチ、サーモンのピロシキ